

永禄11年(1568)9月、信長が將軍足利義昭を擁して上洛する前の京(都)の、覇権争奪はどうだったのか。

細川晴元、將軍足利義輝、三好長慶、六角承禎、三好三人衆、そして、松永久秀らは。

三好三人衆を蹴散らした信長は、秀吉・明智光秀らの活躍で畿内を制覇。天正元年7月信長は義昭を追放、畿内の戦国時代は終焉を迎え、安土・桃山時代がはじまる。

# 惟任日向守、 第六天魔王を討つ!

年表帖 明智光秀・織田信長一代記(上巻)



## 目

## 次

「はじめに」にかえて……………	2
目次年表……………	3~23
関連城跡位置図……………	24~27
年表帖 明智光秀・織田信長一代記(上巻) ……	28~235
参考文献及び関連図書……………	236~239
あとがき、奥付……………	240

## 「はじめに」にかえて

畿内では明応2年(1493)4月の「明応の政変」により、室町幕府の中央政権としての機能が決定的に失われた。畿内の戦国時代のはじまりである。細川政元は、同年5月將軍である足利義材(足利義視の子)を竜安寺に幽閉し、明応3年(1494)12月足利義澄を將軍としたことだったが、これに対して足利義材は、京を逃れて地方へと落ち延び、近畿諸国は足利義材派と足利義澄派(細川政元派)と分かれることとなった。細川家もまた、専横を振った政元が、香西元長・薬師寺長忠らによって永正4年(1507)6月に暗殺され(永正の錯乱)、政元の養子三人の内、細川澄之は細川高国に討たれ、細川澄元派と高国派の二派に分かれて抗争することとなった。この間隙を突いて永正5年(1508)6月に周防国の大内義興が、前將軍・足利義尹(元の足利義材、後に足利義植と再度改名)を奉じて上京した。細川高国(政元の養子)は大内義興と組んで義尹を支持すると、細川澄元(政元の養子、細川晴元の父)は義澄を支持し対立。永正8年(1511)8月に足利義澄が死ぬと、澄元方が劣勢となり、澄元は度々京と四国を往復するが結果的には権力を奪えず永正17年(1520)6月に阿波で死んだ。

永正18年、細川高国は、足利義植を追放し足利義晴(足利義澄の子)を將軍に迎える。

さあ、年表帖がはじまります。

永禄11年(1568)9月織田信長は足利義昭を報じて上洛、元亀4年(1573)7月信長は義昭を追放し、畿内の戦国時代は終わり、「安土桃山時代」がはじまります。この上巻は、天正元年(1573)までを掲載しております。

一部を除き日付までを記載しています。なお、不明な月・日付に関しては「-」で割愛、または「夏」「頃」などと表記している箇所もございます。ご了承下さい。特に重要と思われる事項(歴史の流れのために必要と思われる事件等)は、太字で記載しております。

西暦 和暦	月日	出来事	No.
1521 大永1	8月23日	戦乱、天変などの災異のため、永正から「大永」に改元。	0001
	12月25日	足利義晴、征夷大將軍となる。第十二代。	0002
1527 大永7	2月13日	「桂川の戦い—細川高国政権崩壊」。	0005
	3月-	「堺公方政権が成立」。細川六郎(晴元)が、堺に政権をたてる。	0006
	7月13日	足利義賢(義維)、朝廷から従五位下・左馬頭に叙任される。	0008
	8月13日	堺の細川六郎(晴元)、東寺に久世荘本所分を安堵する。以後、二十数年にわたり京都を実質支配するとされる。	0009
1528 大永8	3月10日	氏王丸(明智光秀)、美濃国明智長山城主の父・明智光綱(光隆)24歳、母・お牧の方(若狭武田氏出身)19歳の子として生まれる。幼名は氏王丸、桃丸など。	0010
1528 享禄1	8月20日	「享禄」に改元。後奈良天皇即位のため改元。	0015
1531 享禄4	6月4日	「大物崩れ」(天王寺の戦い)。赤松政祐・細川六郎(晴元)・三好元長の連合軍、摂津大物で、細川高国・浦上村宗(備前守護代)の連合軍を破る。	0020
1532 享禄5	6月20日	「顕本寺の戦い—堺公方政権崩壊」。	0023
1532 天文1	10月16日	「室町幕府、復興」。細川六郎(晴元)奉行・茨木長隆、足利義晴奉公衆の所領を安堵する。	0026
1534 天文3	4月22日	熊千代(細川藤孝)、三淵晴員の次男として京都東山に生まれる。	0031
	5月12日	吉法師(信長)、織田信秀・土田御前(母)の次男または三男として生まれる。	0032
	9月3日	足利義晴入京し、建仁寺に館す。	0037
	10月-	この月、畿内・阿波の戦国大名・三好利長(長慶)、細川六郎(晴元)と講和(晴元に帰服)、幕僚(内衆)となる。	0038
1536 天文5	3月10日	菊幢丸(後の第十三代將軍足利義輝)、將軍足利義晴の嫡男として誕生。	0050
	7月27日	「天文法華の乱」。洛中の法華宗(日蓮宗)の二十一本山が全て炎上。	0053
	9月24日	「細川晴元が入京」。細川六郎、三好利長(長慶)らを従えて、芥川城より京都入る。	0058
1537 天文6	2月6日	木下藤吉郎(後の秀吉)、尾張国愛智郡中村に生まれるという。	0064
	11月3日	千歳丸(足利義昭)(後の室町幕府第十五代將軍)、足利義晴の次男として生まれる。	0069
1539 天文8	1月14日	「三好長慶、率兵入京する」。	0079
	8月14日	三好範長(長慶)、摂津芥川城を出て越水城に戻る。摂津半国の守護大名となる。	0087
	10月1日	細川晴元と和睦した三好利長(長慶)、摂津腰水城より入京、幕府に出仕する。	0091
1541 天文10	6月29日	三好利長(長慶)、摂津国守護代となる。	0104
	10月29日	細川晴元、河内半国・山城半国守護代の木沢長政が上洛の兆しのため岩倉へ避難。	0108
	11月1日	將軍足利義晴、志賀越から近江坂本に退去する。	0110
	12月8日	細川晴元、木沢長政討伐挙兵。	0112

西暦 和暦	月日	出来事	No.	
1542 天文11	2月28日	将軍足利義晴、近江坂本から帰京。	0116	
	3月17日	「太平寺の合戦」で、三好範長(長慶)ら、木沢長政を打ち破る。木沢長政、討ち死。	0117	
	4月8日	室町第竣工し、足利義晴、相国寺より移徙する。同日、幕府、撰銭を禁止する。	0119	
	8月23日	「大桑城の戦い」。斎藤利政(道三)、美濃国守護・土岐頼芸ら追放し美濃を奪う。	0120	
	11月20日	<b>千歳丸(足利義昭)6歳(後の幕府第十五代将軍)、仏門に入り、「覚慶」と名乗った。</b>	0123	
	12月26日	竹千代(徳川家康)、生まれる。	0125	
1543 天文12	1月6日	本願寺顕如光佐(本願寺第十一世)、誕生。	0126	
	6月-	氏王丸16歳、元服、「明智十兵衛尉光秀」となるという。	0129	
	7月21日	<b>「細川氏綱が挙兵」</b> 。氏綱、細川晴元打倒を掲げて和泉槇尾寺にて挙兵する。	0130	
	—	<b>明智光秀15歳、斎藤利政(道三)に出仕して学ぶ。</b> (『明智軍記』)。	0133	
1545 天文14	5月26日	都を奪回した細川晴元、その軍を解散したが、残党狩りを命じられた三好政長と三好範長(長慶)、三室戸の大鳳寺に陣を張り放火する。	0142	
1546 天文15	9月13日	上野玄蕃頭元治の軍勢は、将軍義晴を氏綱側に迎え取ろうとして京都に向かう。	0152	
	9月15日	三好政長、細川晴元を赴援するが、敗れて政長・晴元は丹波へ逃げる。	0154	
	12月20日	<b>足利義藤(義輝)、11歳にして、亡命先の近江坂本で十三代征夷大将軍に就任。</b>	0162	
	12月20日	細川氏綱方の遊佐長教、畠山政国の名代として将軍足利義藤(義輝)の将軍宣下の儀式に参列。	0163	
	12月24日	将軍足利義藤(義輝)、後見足利義晴、近江より帰洛する。	0164	
	—	<b>この年、吉法師、尾張国古渡城に於いて13歳で元服、「織田三郎信長」と名乗る。</b>	0165	
1547 天文16	2月20日	「劣勢の晴元側の反撃」。三好範長(長慶)・義賢(実休)兄弟、将軍足利義藤(義輝)と父義晴に対抗して、細川氏綱方の摂津原田城を陥落させる。	0167	
	3月29日	細川晴元を捨てて細川氏綱を取ることを決意した足利義晴・将軍足利義藤(義輝)、公家衆、幕臣九百余騎と共に、晴元を討つため京都北白川城(勝軍山城)に入城。	0169	
	6月25日	入京した細川晴元、京都北白川城(勝軍山城)を攻撃し慈照寺を破却する。	0170	
	7月19日	細川晴元・三好範長(長慶)ら、足利義晴らを北白川城に攻撃。義晴・将軍義藤(義輝)は近江坂本へ逃亡。畿内の大半は、河内・大和を除いて細川晴元が制圧。	0175	
	7月21日	「舍利寺の戦い」。三好義賢(実休)・安宅冬康は、南進して、高屋城から北進の細川氏綱・畠山政国・遊佐長教らと摂津舍利寺で遭遇、大勝する。	0176	
	7月29日	足利義晴、細川晴元・六角定頼と和睦を申し入れ、晴元・定頼が、近江坂本の将軍足利義藤(義輝)に出仕する。	0177	
	—	<b>「吉良大浜の戦い—信長初陣」</b> 。この年、初陣の織田信長(14歳)、三河の吉良大浜城に進出の今川勢を攻撃。	0181	
	1548 天文17	4月24日	管領代・六角定頼の仲介で、三好党と畠山・遊佐両氏の間に和睦が成立。	0185
	—	「細川晴元・三好長慶と細川氏綱・遊佐長教の和睦成立の証」。	0186	

西暦 和暦	月日	出来事	No.	
1548 天文17	5月-	この月、三好長慶と三好政長の対立が再発。三好長慶、三好政長の中島・榎並の二城を攻撃。細川晴元は、三好政長を助ける。	0188	
	6月-	この月、足利義晴・将軍足利義藤(義輝)父子・坂本から帰洛。	0190	
	10月18日	<b>「三好長慶、細川晴元に叛旗」</b> 。 長慶、細川氏綱と手を組み、細川晴元・三好政長に謀叛。	0196	
	12月-	この頃、織田信秀と美濃の斎藤利政(斎藤道三)の間に和睦が成立。	0197	
	1549 天文18	2月24日	<b>「織田家と斎藤家の和睦同盟。信長、濃姫(帰蝶、胡蝶など)と政略結婚」</b> 。	0201
6月24日	<b>「江口の戦い—二十数年続いた細川晴元政権崩壊」</b> 。	0213		
6月28日	足利義晴、将軍足利義藤(義輝)父子、細川晴元ら、慈照寺から近江国坂本へ逃亡。志賀越を通り、坂本の常在寺へ入り、ここを仮幕府とする。	0216		
7月9日	<b>「細川氏綱・三好長慶政権が成立」</b> 。三好長慶、細川氏綱を擁して入京。	0218		
7月-	この月、織田信長、六弋玉の鉄砲五百挺の製作を、国友村の鍛冶らに命じる。	0221		
11月9日	松永久秀、狩野宣政、三好長慶の「内者(被官)」となる。	0224		
11月-	<b>「織田信長制札—信長の初見文書」</b> 。この月、織田信長(16歳)、尾張国熱田神社へ全五ヶ条の制札を下し、「藤原信長」と署名。	0226		
12月11日	「戦国大名の楽市令の初見」。六角氏による近江石寺の楽市令。	0227		
1550 天文19	4月10日	<b>明智光秀23歳、妻木勘解由左右衛門範熙の娘熙子16歳と婚姻(再婚)とされる。</b>	0233	
	5月4日	足利義晴(室町幕府前将軍)、近江国穴太で没。享年40(満39歳没)。	0236	
	6月9日	将軍足利義藤(義輝)、細川晴元・六角勢を率いて如意岳の京都中尾城に入城し立て籠る。	0237	
	7月14日	三好長逸・十河一存等、入京し、細川晴元の兵と戦う。三好被官、細川晴元軍の鉄砲で死ぬ。(『言継卿記』)。	0241	
	10月19日	<b>三好長慶による最初の段銭徴収</b> 。長慶被官、桂川以西に段米賦課を行う旨、近隣農村に触れを出す。	0244	
	11月19日	三好長慶勢力下の摂津・丹波・河内の軍勢四万が上洛、細川晴元勢を一掃。	0248	
	11月21日	三好長慶、摂津より入洛し、足利義藤(義輝)の籠もる中尾城に迫る。河東諸郷を焼掠され、義藤(義輝)は近江に逃走する。	0249	
	1551 天文20	2月10日	将軍足利義藤(義輝)ら、堅田より竜華・葛川谷を越え、奉公衆朽木氏を頼り、朽木館に移る。義輝と細川晴元の連携が崩れだす。	0257
	3月3日	三好長慶、京都市中に地子銭を課す。松永久秀はこれを厳しく取り立てる。	0261	
3月3日	信長父・織田信秀、未森城で「疫病」のため没す。享年42。	0262		
3月-	<b>この月、織田信秀の死を受けて、嫡子信長が弾正忠家の家督を継ぐ。</b>	0263		
3月14日	三好長慶に対し抵抗する香西元成・三好政勝・丹波勢、洛中に乱入、ゲリラ活動。	0266		
4月-	鳴海城の山口教継(左馬助)が、今川氏に通じ、信長を背く。	0268		
7月14日	「相国寺の戦い」。京都相国寺、三好軍と松永軍の戦鬪により全焼。	0270		
1552 天文21	1月2日	近江の六角定頼、没。享年58。後を嫡男・義賢(後の承禎)が継ぐ。	0272	

西暦 和暦	月日	出来事	No.
1552 天文21	1月28日	六角定頼が没し、足利義藤(義輝)は、三好長慶と和し、細川聡明丸(後の昭元、晴元嫡子)を伴い近江国より帰洛する。	0274
	3月11日	細川氏綱、「右京大夫」に任じられる。三好長慶が推す細川氏綱が第十八代京兆家(宗家)、弟の細川藤賢が典厩家を相続することが認められる。	0279
	4月17日	「信長―赤塚の戦い」。織田勢と山口教継勢が赤塚で合戦するも決着はつかず。	0283
	4月25日	「第二次八上城の戦い」。三好長慶、丹波に侵攻し、和睦に反対し拳兵した波多野元秀兄弟の八上城を攻めるも、退けられる。	0285
	8月16日	「信長―萱津の戦い」。	0291
	8月-	この月、細川晴元が丹波に出奔する。	0292
	10月21日	「信長、初の知行宛を行う」。	0298
	1553 天文22	1月-	この月、三好長慶、幕府政所執事伊勢貞孝と庶政を協議。ようやく、長慶の洛中支配が強化されてくる。
閏1月15日		三好長慶、足利義藤(義輝)と和睦する。	0311
3月8日		足利義藤(義輝)、三好長慶との和が破れ、京都霊山城に入城する。	0318
4月20日		富田の正徳寺にて斎藤道三と織田信長が会見する。	0322
7月-		この月、細川晴元勢が上洛を試みるも、將軍足利義藤(義輝)の奉公衆と河内の安見氏の軍勢に退けられる。	0326
7月28日		細川晴元、霊山城に入って、將軍足利義藤(義輝)と同心する。	0328
8月1日		「霊山城の戦い―三好長慶の畿内制覇成り、室町幕府中絶する」。	0329
8月29日		「三好長慶政権が成立」。三好長慶が、細川聡明丸(後の昭元)を奉じて摂津芥川城に入る。以後、ここに居住する。	0333
1554 天文23	1月24日	「信長―村木城の戦い」。信長、尾張国村木城を攻略。	0348
	3月-	この月、美濃を完全に平定した斎藤利政(道三)、家督を子の義龍へ譲り、自らは常在寺で剃髪入道遂げて「道三」と号し、鷺山城を修築し隠居。	0353
	7月18日	「安食の戦い(成願寺の戦い)」。 信長の命を受けた柴田勝家(「柴田権六」)、尾張国清洲城を攻撃。	0359
	8月13日	本願寺証如(光教)(本願寺第十世)、没。享年39。顕如(12歳)、宗主になり、祖母の慶寿院鎮永尼が後見する。	0361
	11月16日	織田信長、祖父江九郎右衛門に、俵子船一艘の諸役免許を与え、「上総守信長」と署名。	0365
	—	この年、木下藤吉郎(秀吉)、尾張に帰り、織田信長の小者として仕えた。	0367
	4月20日	織田信光(信秀弟)、攻め寄せ守護代織田彦五郎(信友)を自刃させ尾張国清洲城を乗っ取り、これを織田信長へ譲渡。	0372
1555 弘治1	10月23日	「弘治」に改元。戦乱などの災異のため改元という。	0381
1556 弘治2	2月11日	三好長慶、山城にて「七ヶ条の掟」を定め、松永久秀がこれを奉行する。	0388
	3月-	「織田信長、三河へ出陣」。この月信長、八ツ面山の荒川城を攻撃。	0390

西暦 和暦	月日	出来事	No.	
1556 弘治2	—	この年、信長、斯波義銀に尾張一国を譲り国主に据えるとし、清洲城本丸を進呈、自身は北の櫓に退く。	0392	
	4月19日	「信長への国譲り状」。死を覚悟した斎藤道三(信長舅)が美濃国を婿・信長に譲る旨を認める。	0394	
	4月20日	「長良川の戦い」。美濃国を治める斎藤道三、戦死。享年63。	0395	
	—	この頃、尾張の上郡四郡を守る守護代の一人、岩倉城の織田信安が、斎藤義龍と結び信長に敵対行動を取るようになる。	0397	
	6月26日	織田信長、角田新五らが籠る守山城を攻める。	0404	
	8月22日	「信長公と信行殿の対立は深まり、ついに信行殿は信長公の直轄領である篠木を押領して砦を構えた」。(『信長公記』)。	0407	
	8月24日	「信長―稲生の戦い」。 信長、尾張国稲生に於いて柴田勝家・林美作守らと衝突、信長軍が勝利する。	0410	
	9月25日	味方した道三が死に、斎藤義龍に居城・明智長山城が攻められて落城、明智光秀は脱出して諸国遍歴に出る。(『明智軍記』)。	0415	
	1557 弘治3	9月18日	織田信長の使者が、津田宗達(宗及の父)の茶会席に現れる。	0425
		10月27日	正親町天皇、踐祚する。第百六代。	0427
1558 永禄1		2月28日	「永禄」に改元する。正親町天皇即位のため改元。	0440
	3月7日	「品野城の戦い―桶狭間前哨戦」。織田信長、大敗。	0441	
	5月3日	近江朽木谷の足利義輝、細川晴元以下三千余の軍勢を率い坂本へ移る。	0442	
	6月2日	三好長逸・松永久秀ら、京都勝軍山に城を構築し足利義輝の入洛を阻止。	0446	
	7月12日	「信長―浮野の戦い」。信長、岩倉城の織田信賢の軍勢三千を丹羽郡浮野に破る。	0451	
	7月14日	三好長慶、濫りに洛中地子を徴集。幕府、阻止できず。	0453	
	11月27日	「幕府が復活し、三好長慶の京都支配は、形式的に終わる」。	0458	
	12月18日	三好長慶・松永久秀、京都より摂津国芥川城に還る。	0461	
	1559 永禄2	1月-	「岩倉城の戦い―信長、ほぼ尾張を統一する」。 信長、降伏開城した織田信賢を追放し、岩倉城を破却。	0468
		2月2日	「信長、初上洛」。「尾州より織田上総介上洛云々、五百ばかりと云々、異形者多しと云々」。(『言継卿記』)。	0469
2月7日		「尾州之織田上総介、昼に立ち、帰国す」。(『言継卿記』)。	0470	
4月27日		長尾景虎(上杉謙信)、二回目の上洛。	0473	
8月2日		三好長慶と和睦した河内守護畠山高政、三好氏の後押しを受けて、安見宗房らを追放して高屋城に復帰する。畠山氏が三好の下に置かれた。	0482	
8月4日		三好長慶、細川氏綱を淀城を居らせ軟禁。	0485	
8月8日		三好長慶方の松永久秀、大和信貴山城を修築し、ここに大和支配の拠点を構える。	0487	
10月26日		長尾景虎(上杉謙信)、京都から越後に帰国する。	0491	

西暦1521

大永1	8月23日	戦乱、天変などの災異のため、永正から「大永」に改元。	0001
	12月25日	足利義晴(1511~1550)、征夷大將軍となる。第十二代。 11歳の義晴は実際の政務を行うには未熟で、細川高国(第三十一代室町幕府管領)(1484~1531)や政所執事(頭人)の伊勢貞忠(1483~1535)らが政務の運営にあたった。永正18年(1521)3月7日、足利義植(室町幕府第十代將軍)(1466~1523)が京を出奔。このため同月22日に行われた後柏原天皇(1464~1526)の即位式は、高国のもとで行われた。これにより天皇の信任を失った義植を排斥して、かつての敵対者であった足利義澄(1481~1511)(第十一代將軍)の遺児である足利亀王丸を擁立。將軍不在による細川高国政権の存続危機を防いだ。7月6日には亀王丸の上洛を迎え入れると、大永に改元後の8月29日には、亀王丸による代始の参賀を行わせた。12月24日に元服して「義晴」と改名した亀王丸は、この日將軍に補任された。その後、前將軍義植からの侵攻を何度か受けるが、大永3年(1523)4月に義植も死去したため、細川高国の勝利に終わった。12月24日に義晴の元服関係の儀式終了後に細川高国が辞任した後は、管領職自体が、ずっと空席のままであったという。	0002

西暦1525

大永5	2月2日	祖父実如(浄土真宗本願寺派第九世宗主)(1458~1525)の死により、本願寺証如光教(1516~1554)が本願寺第十世を継ぐ。10歳と幼い証如に代わって蓮淳(1464~1550)が見後人(証如の外祖父でもあった)として本願寺を取り仕切る。	0003
-----	------	---	------

西暦1526

大永6	4月29日	後奈良天皇(1497~1557)、後柏原天皇の崩御にともない踐祚。第百五代。皇位の象徴である三種の神器を受継ぐことを「踐祚」、皇位につくことを天下に布告することを「即位」という。現在の「皇室典範」・「皇室典範特例法」で踐祚という言葉はなくなった。	0004
-----	-------	---	------

西暦1527

大永7	2月13日	「桂川の戦い—細川高国政権崩壊」。丹波の柳本賢治(?~1530)・阿波の三好元長(長慶父)(1501~1532)らの反細川高国派連合軍、京に侵攻、細川高国方の武田元光(1494~1551)を川勝寺(京都市下京区西京極中町長福寺(川勝寺))に攻め大破する。細川高国は、將軍足利義晴を擁したまま近江坂本に逃れ、高国政権は崩壊。	0005
	3月-	「堺公方政権が成立」。細川澄元(第三十代室町幕府管領)の子・細川六郎(晴元)(1514~1563)が、堺に政権をたてる。	0006
	5月2日	足利義賢(義維)(1509~1573)、神泉苑作毛を下津屋某に充行う。阿波公方と呼ばれた足利義賢(義維)は、細川六郎(晴元)(1514~1563)と共に、三好元長(長慶父)に奉じられて和泉国堺に入った。	0007
	7月13日	足利義賢(義維)、朝廷から従五位下・左馬頭に叙任される。義賢は「義維」と改名し、崩壊同然となった室町幕府に代わる新政権(いわゆる堺公方府)を発足させた。義維は、次期將軍として約束されていたため堺公方(または堺大樹)と呼ばれるようになる。和泉国堺を本拠とした細川六郎(晴元)は、都落ちにより実態を失った細川高国政権に替わるべく、義維を將軍に戴く「堺公方府」という擬似幕府を創設した。	0008

西暦1527

大永7	8月13日	堺の細川六郎(晴元)(1514~1563)、東寺に久世莊本所分を安堵する。この頃より晴元は堺に居ながら京都および山城国・摂津国の実権を握り、その臣茨木長隆(?~?)が京都代官として、以後、二十数年にわたり京都を実質支配したとされる。	0009
-----	-------	--	------

西暦1528

大永8	3月10日	氏王丸(明智光秀)(1528?~1582)、美濃国明智長山城主の父・明智光綱(光隆)(1504?~1538?)24歳、母・お牧の方(若狭武田氏出身)(1509?~1579?)19歳の子として生まれる。幼名は氏王丸、桃丸など。また、「明智氏一族宮城家相伝系図書」には「光綱生得多病 而日頃身心不健也 因家督之一子設不 故ニ父宗善之命蒙 甥ノ光秀養 以テ家督為 光秀ハ光綱之妹婚進士勘解由左右衛門尉信周之次男也」。光秀の実母は明智光綱の妹と記載されているなど、諸説あり。同年8月17日、大永3年(1523)、永正13年(1516)生まれなど諸説あり、1516年生まれ説が有力という。しかし、親しかった吉田兼見(1535~1610)、細川藤孝(1534~1610)の生年と近江坂本から丹波・丹後への出陣などを鑑み、当書では、1528年生まれとした。信長より6歳、家康より15歳、秀吉より9歳、年長である。母・お牧の方は、光秀2歳の頃、明智光綱と離縁して若狭に戻った。光綱が再婚するまで、光秀の母親代わりになったのは、16歳の小見の方(光秀父光綱の妹)(1513~1551)とされる。上記はあくまで一つの説であり、「明智十兵衛尉」としての確実な史料初見は光秀の口伝を筆録した沼田勘解由左衛門(清延)から、永禄9年10月20日に米田貞能が近江坂本で写したものとされ、それ以前の光秀については分からないのが現状である。明智家は、美濃源氏の嫡流、美濃・尾張・伊勢の守護大名、清和源氏土岐氏の支流氏族とされる。発祥地は恵那明智町(岐阜県恵那郡)であったが、土岐宗家5代頼遠の本拠地を土岐郡から厚見郡に移動、守護所を岐阜長森移転に伴い、明智宗家は明智庄(可見市)へ移転すると、明智家も従い明智庄へ本拠を移し、明智城(岐阜県可見市明智)を居城として築くとされる。明智氏は、室町幕府に直接仕える奉公衆(將軍に近侍する武官官僚)でもあり、京に在し將軍近くで務めることも多かった。そのため、公家衆との縁も深かったという。	0010
	5月14日	三好元長と和睦しようやく上洛を果たした細川高国だが、細川六郎(晴元)との和が敗れ、怒る三好元長は和泉に下向する。	0012
	5月14日	細川高国(1484~1531)は、細川尹賢(?~1531)と共に、再び近江へ逃走する。	0013
	5月28日	入洛したが、將軍足利義晴(1511~1550)は、堺公方足利義維(1509~1573)との和成らず、坂本に逃亡する。	0014
享禄1	8月20日	「享禄」に改元。後奈良天皇即位のため改元。朝廷は、この改元を義維ではなく、依然として將軍位に在った義晴に諮ったことを不満として新年号を認めず、同年11月までは大永の年号を使用し続けるとされる。	0015
	10月24日	堺公方足利義維、大徳寺養徳院に松ヶ崎の地を安堵する。	0016

西暦1529

享祿2	3月13日	細川六郎(晴元)(1514~1563)、料所年貢米の未納により、洛中洛外米屋に足利義維(1509~1573)の食米を納めさせる。	0017
-----	-------	--	------

西暦1530

享祿3	6月29日	<p><b>「依藤城の戦い」。</b>堺公方足利義維後見人の柳本賢治(?~1530)、播磨国依藤城(豊地城)(兵庫県小野市中谷町)を攻撃中、東条谷の玉蓮寺の陣中で暗殺される。柳本賢治の兄は、波多野秀長の長男の波多野植通(1496~1530)で、香西元盛(?~1526)、柳本賢治の兄。別名は波多野元清という。</p> <p>多紀郡を掌握した元清は、新たな支配拠点として、朝路山山上に八上城(兵庫県丹波篠山市八上)を構築。その一方で、弟元盛を讃岐出身の京兆家内衆の香西氏に、末弟の賢治を大和国衆の柳本氏に入れるなどして、細川氏内部での立場を強化していった。西丹波を支配する一人に過ぎなかった波多野家を戦国大名へ昇進させ、最盛期を築いたとされる。</p>	0018
-----	-------	---	------

西暦1531

享祿4	2月21日	三好元長(1501~1532)、主君細川六郎(晴元)(1514~1563)と和睦して、この日、阿波から堺に到着。	0019
	6月4日	<p><b>「大物崩れ」(天王寺の戦い)。</b></p> <p>赤松政祐・細川六郎(晴元)・三好元長の連合軍、摂津大物(兵庫県尼崎市大物町)で、細川高国・浦上村宗(備前守護代)(?~1531)の連合軍を破る。</p> <p>赤松政祐(後の晴政)(1513/1495~1565)は、陣する前から堺公方足利義維(1509~1573)へ密かに質子を送って裏切りを確約していた。この赤松軍の寝返りは細川高国軍の動揺をもたらし、浦上軍に従っていた「赤松旧好の侍、吾も吾もを神呪寺の陣へ加わり」(『備前軍記』)と寝返りを誘発した。</p> <p>しかし、畠山総州家の畠山義堯、三好元長は、堺公方の処遇を巡って細川晴元と対立した。</p>	0020
	8月9日	堺公方足利義維、鹿王院大先と等河との祠堂銭相論を裁許する。	0021

西暦1532

享祿5	6月15日	<b>「飯盛城の戦い」。</b> 細川六郎(晴元)の要請を受け入れた本願寺一揆軍、晴元に近付く木沢長政(1493?~1542)の居城・飯盛城(飯盛山城)(大阪府大東市及び四條畷市)を攻囲する畠山義堯(?~1532)・三好元長連合軍を攻め破る。義堯は自刃。	0022
	6月20日	<p><b>「顕本寺の戦い—堺公方政権崩壊」。</b></p> <p>勢いに乗る本願寺一揆軍、畠山義堯に加担した元長を顕本寺に攻め寄せる。堺公方足利義維後見人の三好元長(長慶父)(1501~1532)、<b>堺の顕本寺(法華宗)にて、主君細川六郎(晴元)(1514~1563)により自害させられる。</b></p> <p>後ろ楯を失った義維は、この後、阿波国平島に帰った。</p> <p>大永7年(1527)からこの五年間の足利義維(1509~1573)は、堺に居て、実質上幕政の中心にいたともいわれる。</p>	0023
天文1	7月29日	<p><b>「天文」に改元。</b></p> <p>室町幕府十二代將軍足利義晴の申請により、戦乱などの災異のため改元。</p>	0024

西暦1532

天文1	8月24日	<p><b>「山科本願寺の戦い」。</b></p> <p>細川六郎(晴元)・六角定頼が法華門徒(延暦寺衆徒)と連合。本願寺光教(証如)(1516~1554)を山科に攻め本願寺を焼く。光教(証如)、石山に出奔する。</p> <p>五十三年間にわたって隆盛を極めた山科本願寺は消滅し、本願寺は、天文2年、大坂の石山坊舎に移る。</p> <p>蜂起したまま乱行を重ねた一向一揆軍の鎮圧に神経を費やした細川六郎(晴元)は、一向宗の対立宗派であった法華宗とも協力して法華一揆を誘発させ、他にも領内で一向宗の活動に悩まされていた近江国の六角定頼とも協力した。</p>	0025
	10月16日	<p><b>「室町幕府、復興」。</b></p> <p>細川六郎(晴元)奉行・茨木長隆(?~?)、足利義晴奉公衆の所領を安堵する。</p> <p>將軍足利義晴(1511~1550)、六角定頼(1495~1552)・六角義賢(後の承禎)(1521~1598)父子の後援を得て、細川六郎(晴元)(1514~1563)と和解。細川六郎(晴元)は、堺公方府としての政権奪取というこれまでの方針を転換、將軍・義晴と和睦し、その管領に就こうとした。が、足利義晴は、その後も細川晴元と対立して敗れたのち、和解して帰京するといった行動を繰り返す。</p>	0026

西暦1533

天文2	2月2日	堺の細川六郎(晴元)、一向一揆の攻撃を受け淡路国に逃れる。	0027
	2月-	この月、光秀の叔母・小見の方(1513~1551)が、長井新九郎規秀(斎藤道三)(1494?~1556)に嫁ぐとされる。	0028
	4月6日	細川六郎(晴元)、淡路国より池田城(摂津国)に入る。晴元は、体勢を立て直す。	0029
	6月20日	<p><b>細川六郎(晴元)(1514~1563)、本願寺光教(証如)(1516~1554)と和解。</b>同日、六郎(晴元)、本満寺等の洛内法華寺院に軍忠状を送る。</p> <p>「三好仙熊に披(和睦)をまかせて」(『本福寺明宗跡書』)とある。三好長慶が仲介の労をとったのか。三好仙熊(長慶)(1522~1564)は、この直後に元服したとされ、孫次郎利長と名乗り、伊賀守を称したという。</p>	0030



山科本願寺跡

天文3	4月22日	熊千代(細川藤孝)(1534~1610)、三淵晴員(1500~1570)の次男として京都東山に生まれる。後に父晴員と共に十二代将軍足利義晴の近臣であった細川晴広の養子となる。天文10年1月12日には、細川伊豆守高久(養父晴広の父)と共に幕府に出仕、将軍足利義晴に謁見する。天文15年(1546)、十三代将軍義藤(後の義輝)の偏諱を受け、「藤孝」を名乗る。幕臣として義輝に仕え、天文21年(1552)に従五位下兵部大輔に叙任される。異母兄が三淵藤英(?~1574)である。	0031
	5月12日	吉法師(信長)(1534~1582)、尾張国勝幡城(愛知県愛西市勝幡町と稲沢市平和町六輪字城之内)主・織田信秀(1510?~1551)・土田御前(母)(?~1594)の次男または三男として生まれる。長男の信広(?~1574)の生母が側室だったので相続権がなく、次男の信長が正室の子であったため織田家の嫡男となったという。「~法師」という幼名は、男子は幼少の剃、剃髪していたので、それを法師に見立てて付けられている。  池田恒利(?~1538?)の妻(養徳院)(1515~1608)が乳母。池田恒興(1536~1584)の母である。善徳院はのちに信長の父の織田信秀の側室となっている。大御乳様と敬称された。  尾張国は八郡からなっていた。うち上四郡は織田伊勢守家が支配し、岩倉に居城を構えていた。また下四郡は織田大和守家が従えており、清洲城(愛知県清須市一場)に武衛様(斯波家)を住ませ、自らも城中にあって仕置を行っていた。尾張国下四郡の大和守の家中には三家の奉行(清洲三家老)があった。織田因幡守家・織田藤左衛門家・織田弾正忠家であり、この三家が諸沙汰を取りしきっていた。このうち織田弾正忠家は国境近くの勝幡に居城を構えていた。この時の当主は備後守信秀で、弟に与二郎信康・孫三郎信光・四郎二郎信実・右衛門信次があった。	0032
	5月29日	本願寺光教(証如)(1516~1554)、細川六郎(晴元)(1514~1563)との和議を破棄し、細川晴国(高国の弟)(?~1536)と結んで挙兵する。	0033
	6月8日	将軍足利義晴(1511~1550)、関白近衛尚通の娘・慶寿院(1514~1565)と、婚儀。雷を伴う夕立ちの中、近江国桑実寺で挙行という。足利将軍家の正室は足利義満以来、日野家から迎えられてきたが、ここにおいて初めて摂関家から正室を迎えた。	0034
	8月3日	細川六郎(晴元)に接近したが、一向一揆とは対立を続ける木沢長政(1493?~1542)・三好政長(1508~1549)ら、一向宗徒を山城の谷山城(西京区松尾万石町付近)に攻め敗れる。	0035
	8月28日	室町幕府の復興を目論む細川六郎(晴元)(1514~1563)、摂津より上洛し相国寺に宿す。	0036
	9月3日	足利義晴が入京し、建仁寺に館す。 室町幕府第12代将軍足利義晴(1511~1550)、約三年にわたり幕府を管んだ、近江湖東の観音寺城山麓桑実寺(滋賀県蒲生郡安土町桑実寺675)を引き払い、入京。	0037

天文3	10月-	この月、畿内・阿波の戦国大名・三好利長(長慶)(1522~1564)は、河内・山城南部の守護代・木沢長政(1493?~1542)の仲介で細川六郎(晴元)(1514~1563)と講和(晴元に帰服)、幕僚(内衆)となる。 長慶父・三好元長(1501~1532)は細川晴元配下の有力な重臣で、阿波国や山城国に勢力を誇っていたが、享祿5年(1532)6月に、元長の勢力を恐れた晴元は一向宗の力を借りて、元長を殺害した。このとき長慶は、木沢長政の仲介や、年少であるという理由から許されて、細川晴元に従うことになる。	0038
	—	斎藤利三(1534~1582)、斎藤利賢の次男として生まれる。母は、光秀祖父・明智光継の次女という。天文7年(1538)11月27日生まれるともいう。 利三は、実兄の石谷頼辰(?~1587)や明智光秀(1528?~1582)と同様に幕府の奉公衆の出身であり、上京後に摂津国の松山新介(重治)に仕え、次いで斎藤義龍に仕え、後に、西美濃三人衆の一人・稲葉良通(一鉄)(1515~1589)が織田氏へ寝返ると、それに従い稲葉氏の家臣となった。しかし元亀1年(1570)稲葉一鉄と喧嘩別れし、明智光秀との縁戚関係から光秀に仕えるようになったといわれている。光秀には重用され、明智秀満と並ぶ明智氏の筆頭家老として用いられた。 利三母は、明智光秀正室(妻木氏)の姉妹であるとされる。その母は、石谷光政に再嫁し、次女(長宗我部元親正室)をもうけた。利三兄・石谷頼辰は、石谷光政の養嗣子となって、その長女を娶った。 他の説としては、母は斎藤利賢の嫁いだ蛸川親俊(親世)の妹という。 利三正室は斎藤道三と小見の方の娘とされる。利三後室は稲葉一鉄の娘(従弟妹)で、斎藤利宗(1567~1647)、斎藤三存、それに末娘の福(春日局)(1579~1643)らを産んだ。お福は稲葉正成と結婚するが離縁したあと、稲葉重通(?~1598)の養女となり、江戸幕府の第三代将軍徳川家光の乳母となり、権勢を誇った。	0039
		天正7年(1579)8月、光秀が丹波国黒井城を攻略すると、その守備を任される。天正10年1月には、実兄石谷頼辰の義父・空然(石谷光政)に書状を出し、頼辰を派遣する旨を伝えると同時に、空然に長宗我部元親の軽挙を抑えるように依頼した。同年5月には元親から信長の指示に従うとの書状を受けた。しかし、信長は四国攻めを強行する。 本能寺の変前夜には、主君明智光秀、明智秀満・明智治右衛門、藤田伝五、溝尾庄兵衛(勝兵衛)茂朝らと信長討ち果たしを協議したとされる。	

天文4	6月12日	細川六郎(晴元)の兵(畠山氏の家臣・遊佐長教の軍勢)、大坂の本願寺第十世証如(光教)の兵を攻撃して破る。 以後、本願寺は、石山坊に籠城を余儀なくされたが、その後、興正寺第十五世蓮秀(1481~1552)らの努力で、この年11月、和議を成立させ、晴元政権との共存路線を採用する。	0040
	9月15日	本願寺証如(光教)(1516~1554)は、のちに主戦派の執奏役下間頼秀(?~1539)・弟の頼盛(?~1539)を追放。この日、先の敗戦の責任をとらされて、頼秀・頼盛兄弟とその一党が石山本願寺を退出する。	0041
	11月-	この月、本願寺本寺の青蓮院尊鎮法親王(後柏原天皇の第三皇子)(1504~1550)の仲介で、本願寺と細川六郎(晴元)が和議を締結する。	0042

## 西暦1535

天文4	12月1日	本願寺から和陸の使者として、下間頼秀・頼盛の失脚後に本願寺に再出仕した下間頼慶(?~1541)が細川六郎(晴元)の元に、青蓮院へ下間頼次が仲介の御礼の為に派遣される。	0043
	12月23日	本願寺から木沢長政(河内・山城南部の守護代)へ和平の御礼の使者が派遣される。	0044
	－	この年、幕府および細川六郎(晴元)、洛中諸寺社領を還付安堵する。	0045
	－	小見の方(1513~1551)と長井新九郎規秀(斎藤道三)(1494?~1556)の間に、濃姫(帰蝶、胡蝶など)(織田信長正室)(1535~1612?)が生まれる。濃姫と明智光秀(1528?~1582)は、従兄妹とされる。	0046

## 西暦1536

天文5	1月4日	本願寺光教(証如)(1516~1554)、道場を山科に再興し、この日、立柱が行われる。	0047
	2月-	「松本問答」。この月、上総茂原妙光寺の法華門徒・松本新左衛門久吉、一条烏丸の観音堂で、三日から説教を続ける叡山西塔北尾の華王坊と宗論する。山門側が負けたという噂が洛中に広まり、叡山を中心とする旧仏教側の日蓮宗への反発が強まる。そして、権力側による日蓮衆徒包囲戦線を結成。対抗の町衆は大規模な地子不払い運動を展開する。	0048
	2月26日	第百五代後奈良天皇(1497~1537)、踐祚から十年後、ようやく紫宸殿にて即位式を行う。大内義隆の二十万疋(一疋十文)をはじめ、北条氏綱・武田元信・今川氏輝・朝倉孝景・本願寺証如(光教)らの献資による。大内義隆(1507~1551)は、この奉献により太宰大式を許される。義隆の従二位下という異例の昇進は、このような資財献上の結果であり、のち守護ながら従二位・兵部卿と、従四位下右京大夫の細川氏をはるかに凌ぐ官位を授与される。	0049
	3月10日	<b>菊幢丸(後の第十三代将軍足利義輝)(1536~1565)、将軍足利義晴(1511~1550)の嫡男として誕生。</b>	0050
	4月26日	第十二代将軍足利義晴、南禅寺仮第に館す。	0051
	7月2日	将軍足利義晴、京都に警護の兵を派遣するよう、越前国守護朝倉孝景(1493~1548)・若狭国守護武田信豊(1514~1580?)に命じる。	0052
	7月27日	<b>「天文法華の乱」。</b> <b>比叡山延暦寺(天台宗)僧徒と同調する近江・六角氏の軍勢、早朝、四条口から京へ乱入、各所に放火。</b> 翌日まで持った本國寺を含め洛中の法華宗(日蓮宗)の二十一本山が全て炎上。あおりを受けて、上京一帯が焼け、華堂行願寺、百万遍知恩寺、誓願寺(浄土宗)も炎上。また、吉田兼永(兼右の叔父)(1467~1536)らが、乱民に殺される。 京都で勢力を伸ばした法華衆に対し、細川晴元はそれをよしとしなかった。ようやく細川晴元政権の京都での安定を確立する。	0053
	7月28日	京都を追われた法華宗徒の大多数は、堺の末寺に逃れる。	0054
	8月19日	将軍足利義晴、本願寺証如(光教)を赦免し、寺領山科等を還付する。	0055
	8月29日	細川晴国の部将三宅国村(?~?)ら、晴国を裏切り、摂津天王寺に於いて細川晴国(高国の弟)(?~1536)を自刃に追い込み、細川六郎(晴元)(1514~1563)と結ぶ。	0056
	9月5日	本願寺が細川晴元に対し、細川晴国滅亡を祝する使者を送る。	0057

## 西暦1536

天文5	9月24日	<b>「細川晴元が入京」。細川六郎(晴元)(1514~1563)、三好利長(長慶)・波多野秀忠・木沢長政らを従えて、芥川城(大阪府高槻市)より京都入る。将軍足利義晴(1511~1550)に謁し、名実ともに幕府執政となり、管領に相当する政治的地位を継承。</b>  八上城主・波多野稯通(元清)(1496~1530)は享禄3年6月8日に没し、家督は息子の波多野秀忠が継いでいたという。秀忠(?~1545?)・元秀(?~?)・晴通(?~1600)は、兄弟ともいう。	0058
	閏10月7日	細川六郎(晴元)、法華門徒の洛中洛外徘徊、還俗転宗を厳禁する。細川晴元政権による法華宗残党追及がはじまる。	0059
	11月12日	<b>本願寺証如(光教)(1516~1554)、「天文法華一揆」で対立した近江の六角定頼(1495~1552)と和睦する。</b>	0060
	12月11日	将軍足利義晴、南禅寺より、幕府政所執事・伊勢貞孝邸宅に移徙する。	0061
	－	光秀叔父・明智光安(光康)の長男・弥平次(左馬助)(1536~1582)、生まれる。母は三河の三宅氏という。母の実家に入るという。 <b>のちの明智秀満である。</b> 岳父(妻の父)は、三宅出雲(三宅大膳入道長閑)(?~1582)という。三宅長閑斎は実父ともいう。 <b>後世に、「明智光春」とも語られる。</b> 「一書ニ光春ハ元濃州の産、塗師の子也、幼少之時容顏勝れ候故、光秀の寵童と成、三宅弥平次と云、才勇尋常にこへ候得ハ、後に智とせられ、明智左馬助光春と号し、一の老臣として福智山の城主と成、忠興君御咄しに、光春ハ実は塗師の中にも五器塗師の子なれとも希代の者なりしと被仰候也と云々、三宅家記に、左馬助親三宅出雲と申者、天正之比丹波亀山の城ニ居申候、光秀之従類也、其子弥平次光春ハ光秀の甥にて一本ニ弥平次光昌と有、光秀の養子となるとあり、後に家名を改、明智左馬助と号、日向守の聲なりと云々、」(『綿考輯録第二巻 卷九』)。細川家記であるが疑問視されている。	0062
		明智秀満は、明智光秀の後見として、長山明智城にいた父・光安に従っていたが、弘治2年(1556)に斎藤道三と斎藤義龍の争いに敗北した道三方に加担したため、義龍方に攻められ、9月25日落城。その際に父は自害したとされるが、弥平次(秀満)は、光秀らと共に数日前に城を脱出した。 元龜3年(1572)7月、明智光秀の坂本城、ほとんど成り、「明智秀満書状」では、「広間の襖・障子・引手・釘隠しの取り付けについて、責任を持って丁寧に行うこと」と命じている。 天正6年(1578)3月18日、「第二次丹波国征討戦」。長岡(細川)藤孝支援のため丹後宮津にいた弥平次(明智秀満)、福智山に入る。明智光秀は、弥平次(明智秀満)に、藤田行政(伝五)、四王天政考、小野木重勝ら二千の兵をもって黒井城攻めを命じている。 天正6年(1578)8月15日、明智光秀四女・珠(玉)(後のガラシャ)(1563~1600)と長岡(細川)忠興(1563~1646)(藤孝の嫡男)の婚儀が行われる。松井康之(1550~1612)、明智左馬助秀満と山城国勝龍寺城で輿請渡し。 同年11月以降に光秀の三女・倫子(綾戸)を妻に迎えている。倫子は、荒木村重の信長に対する謀反の前、光秀のもとに帰された。そして、光秀家臣三宅弥平次(明智秀満)に再嫁することになった。(『陰徳太平記』)	

次頁につづく。



## 西暦1536

天文5	－	天正8年9月の『宗及茶湯日記』に、三宅弥平次(明智秀満)の名が記される。天正9年(1581)4月10日にも『宗及茶湯日記』に、明知弥平次の名が記される。この頃、倫子(綾戸)を妻に迎えたのだろうか。天正9年(1581)10月6日、丹波福智山城代・明智秀満、丹波国天寧寺(京都府福知山市)へ、「光秀判形」による免許状を下す。倫子は秀満と共にそして福智山城で暮らしていたのだろう。天正10年(1582)6月1日、夜に入り、丹波国亀山にて、惟任日向守光秀(明智光秀)、逆心を企て、娘婿の明智左馬助秀満・従兄弟の明智治右衛門・光秀の傅役の老臣・藤田伝五行政・斎藤内蔵助利三・溝尾勝兵衛茂朝、是れ等として、談合を相究め、信長を討ち果たし、天下の主となるべき調議を究める。光秀、午後10時頃、軍一万三千を率いて、丹波亀山城を出陣。6月2日「本能寺の変」が勃発。6月8日、光秀ら安土城から居城の近江国坂本城に帰還。秀満は安土留守居を命じられた。光秀が6月13日に討たれたことが分かる 6月13日、明智秀満は、安土城に籠城する。 と、安土を引き払い坂本城に籠城する。6月15日「明智一族滅亡」。秀吉方の堀秀政隊が、明智秀満(左馬助)の入った坂本城を包囲。秀満は、国行の刀・吉光の脇差・虚堂の墨跡を蒲団に包み、目録を添えて寄手に呼びかけ、「此道具は私ならぬ事、天下の道具なれば、是にて滅し候事は、弥兵次傍若無人と思召すべく候間、相渡し申候」とて、送り届けさせたという。その後秀満は、光秀の妻子及び妻(光秀の娘)を刺殺し、自害するという。徳川家康の側近として、江戸幕府初期の朝廷政策・宗教政策に深く関与した南光坊天海(1536?～1643)は、姿を変えて生き残った明智秀満であるという説もある。	0063
-----	---	--	------

## 西暦1537

天文6	2月6日	<b>木下藤吉郎(後の秀吉)</b> (1537～1598)、 <b>尾張国愛智郡中村</b> (名古屋市中村区)に生まれるという。(異説1536年)。父は、織田信秀家臣、木下弥右衛門(?～1543)。母は、なか(後の大政所)(1513～1592)。	0064
	4月19日	細川六郎(晴元)、六角定頼の猶子となっていた公家三条公頼(1495～1551)の娘と結婚。	0065
	8月-	この月、細川六郎(晴元)(1514～1563)、右京大夫に任官し、足利義晴の偏諱を受けて「晴元」を名乗る。晴元は、六角定頼や本願寺との提携により幕府政治を本格的に主導。	0066
	8月10日	幕府、六角定頼(1495～1552)を近江守護に補任。	0067
	9月17日	三好利長(長慶)(1522～1564)、淡路に赴く。	0068
	11月3日	<b>千歳丸(足利義昭)</b> (1537～1597)(後の室町幕府第十五代将軍)、 <b>第十二代将軍足利義晴</b> (1511～1550)の <b>次男として生まれる</b> 。兄に嗣子である義輝(1536～1565)がいたため、幼くして外祖父・近衛尚通(1472～1544)の猶子となって天文8年(1539)6月28日仏門(興福寺の一乗院門跡)に入ることが決まる。	0069

## 西暦1538

天文7	3月3日	朝廷、将軍足利義晴の洛中襦法料棟別賦課を卻ける。(['御湯殿上日記』)。「襦法」は、仏教用語で諸經典の諸説によって罪を懺悔する儀式の法則。義晴は、それを棟別に徴集しようとした。	0070
-----	------	--	------

惟任日向守、第六天魔王を討つ！ 年表帖 明智光秀・織田信長一代記(上巻)

## 西暦1538

天文7	3月5日	細川晴元、山城国山崎(京都府乙訓郡大山崎町字大山崎)に築城する。晴元は、普請人夫を洛中洛外から集めた。晴元は、京都と芥川城(大阪府高槻市)の繋ぎの城として山崎城を築いたという。	0071
	7月9日	<b>細川晴元</b> (1514～1563)、 <b>大坂本願寺に「諸公事免許」制札を下す。八月二十七日、大坂寺内に先に発令した徳政令は「大坂寺内相除」の下知</b> 。共に木沢長政(1493?～1542)の奔走によるもの。守護権の介入を排除し、領主の諸賦課を免れ、徳政適用を除外される治外法権。 <b>この本山の特権が、「大坂並み」により各地の一向宗寺内に拡大されてゆく。織田信長がこれの破碎を狙う。</b>	0072
	7月-	この月、河内の遊佐長教(1491～1551)、畠山政国(?～?)を擁立し高屋城(大阪府羽曳野市古市)に入る。畠山氏は室町幕府三管領のひとつであり、政国はその嫡流筋で植長の弟。	0073
	8月7日	<b>明智光秀父・明智光綱(光隆)</b> (?～1538?)、 <b>享年35で没とされる</b> 。享年40とも。父の再婚相手は、進士家の女(進士長江加賀右衛門尉信連ノ娘?)。信教、貞連、康秀と弟が生まれるが、父は、病弱であった。継母は、光綱死後、子たちを引き連れ実家に戻る。継母の子たちは、進士家一門として育ち、後に、光秀に仕えるという。	0074
	9月8日	足利義晴(1511～1550)、細川晴元が山城に段銭を賦課するのを停止する。晴元は、山崎築城により、山城下五郡に段銭をかけた。	0075
	9月-	この月、山門宗徒、法華宗徒退治の申請を衆議する。	0076
	－	<b>この年、氏王丸(明智光秀)</b> (1528?～1582) <b>11歳、父明智光綱没のため、明智城</b> (岐阜県可児市瀬田長山) <b>主となるとされる説がある</b> 。祖父光継(?～1539)の命により光秀叔父の光安(光康)(1500?～1556?)が後見となる。明智光安が城主だったともいう。祖父光継の子は、長男明智光綱、次男山岸光信、三男 明智光安、四男明智光久、五男原頼房、六男明智光廉(三宅長閑斎)、長女小見の方、次女斎藤利賢の妻(後に石谷光政の妻)とされる。	0077
	－	長井新九郎規秀、美濃守護代の斎藤利良 <small>としなが</small> がこの年9月1日に病死すると、その名跡を継いで斎藤新九郎利政(斎藤道三)(1494?～1556)と名乗るという。	0078

## 西暦1539

天文8	1月14日	「 <b>三好利長(長慶)、率兵入京する</b> 」。 <b>畿内・阿波の戦国大名・三好利長(長慶)</b> (1522～1564)、 <b>父の遺領を受けられなかったことに不満を持って、兵二千五百を率いて入京</b> 。長慶は力によってそれを手に入れることに成功。このとき、将軍・足利義晴(1511～1550)は長慶を恐れて近江国に逃走し、細川晴元(1514～1563)は、近江守護・六角定頼(1495～1552)に長慶との和睦を仲介してもらうほどであったという。これにより長慶は摂津守護代・越水城(兵庫県西宮市)主となった。	0079
	6月1日	阿波三好党頭領・三好利長(長慶)(17歳)と兵四千、摂津越水城を出て京都に向かう。	0080

西暦1539

天文8	6月14日	三好利長(長慶)、禁制を発給。長慶は晴元政権内で隠然たる勢力を誇り、軍事的には晴元軍の中核としての活動を始める。三好氏は阿波を軍事基盤とし、三好長慶の次弟之康(実休)に統治させた。三弟冬康には淡路の水軍安宅氏の養子とし淡路を抑えさせた。四弟一存には讃岐の十河氏を継がせ讃岐を支配させた。	0081
	6月25日	三好利長(長慶)(1522~1564)が、細川晴元(1514~1563)に河内十七ヶ所の代官職を三好政長(1508~1549)から自身に返還するように要求するも、晴元はこれを拒否する。	0082
	閏6月25日	將軍義晴(1511~1550)、三好利長(長慶)・丹波の柳本元俊(柳本賢治の子という)に、洛中の賊捕縛を命じる。	0083
	7月14日	細川晴元、三好利長(長慶)を討つため、三好政長(1508~1549)・波多野秀忠(?~1545?)を花園西京に出陣させる。三好利長(長慶)は、向日神社に陣をしく。	0084
	7月23日	細川晴元、徳政令発布を足利義晴に請う。細川晴元が、洛中洛外を除き西岡面ばかりを対象にした徳政令を下した。	0085
	7月28日	細川晴元より和睦の仲介を依頼された近江守護・六角定頼や幕府政所代・蜷川親俊(親世)(?~1569)らの斡旋により、 <b>三好範長(長慶)・細川晴元の撤兵が実現</b> 。	0086
	8月14日	<b>三好利長(長慶)、近江守護・六角定頼らの停戦斡旋受け、摂津芥川城(大阪府高槻市殿町)を出て越水城(兵庫県西宮市)に戻る。摂津半国の守護大名となる。</b> 兵庫津、尼崎、摂津池田氏、伊丹氏を指揮下にする摂津半国守護代になったのは、天文7年ともいう。	0087
	9月6日	細川晴元(1514~1563)、洛外に徳政を令する。同日、茨木長隆(?~?)、土一揆が東福寺に乱入するのを止める。	0088
	9月26日	細川晴元、帰京する。	0089
	9月28日	三好政長(1508~1549)、京都八幡郷に徳政令を発する。幕府はこれを停止する。	0090
	10月1日	<b>細川晴元と和睦した三好利長(長慶)、摂津腰水城より入京、幕府に出仕する。</b>	0091
	10月-	この月、近江守護・六角定頼(1495~1552)の仲介で、三好利長(長慶)(1522~1564)と三好政長(1508~1549)が和睦する。	0092
	12月24日	幕府・茨木長隆、小川一町中に対し、引接寺勧進所の再興を停止させる。「上京町組の初見」。	0093
	-	明智光秀祖父・光継(?~1539?)、没という。氏王丸(明智光秀)(1528?~1582)は土岐明智氏惣領・頼明の養子となるという説がある。兄である明智光綱が身内を殺めたことで家督相続権を奪われたため、土岐明智本家の家督は、頼明が継いだという。	0094

西暦1540

天文9	3月12日	朝廷、足利義晴に禁裏修造を命じる。(['御湯殿上日記']。)	0095
	3月17日	幕府は室町第造営中で費用負担できず、近江守護・六角定頼と協議。將軍義晴は諸大名に献金上納の触れを廻す。	0096
	9月-	この月、近江守護・六角定頼が、北伊勢侵攻に際して、將軍足利義晴(1511~1550)より御内書を得る。	0097

西暦1540

天文9	10月28日	近江守護・六角定頼が、北伊勢に侵攻する際、定頼が本願寺に北伊勢での本願寺門徒が敵に通じないで欲しいと要請し、本願寺証如(光教)がこれを受諾する。	0098
	11月22日	三好利長(長慶)(19歳)(1522~1564)、丹波八上城主波多野秀忠(?~1545?)の娘を妻に迎える。(['三好家譜']。)	0099
	12月30日	近衛禎家(1502~1566)の長男、元服して、將軍足利義晴の名の一字を賜り、近衛晴嗣(後の前久)(1536~1612)と名乗る。正五位下に叙される。	0100
	-	明智光秀叔父・光久の次男・ <b>次郎(次右衛門・治右衛門)(1540~1582)、生まれる</b> 。光秀叔父・光安の子ともいう。治右衛門は、明智光秀(1528?~1582)娘・直江と結婚したとされる。 <b>後世、「明智光忠」と記録される</b> 。弘治2年(1556)、斎藤義龍に明智長山城が攻められて落城、光秀らと共に脱出したとされる。天正3年(1575)2月に丹波過部城らを落とした後、明智光秀は治右衛門を留守居として入れた。天正6年(1578)4月の「第二次丹波国征討戦」では、光秀の播州へ転戦に際し、治右衛門は八上城包囲を続けた。天正7年(1579)6月、兵糧攻めにしていた丹波八上城が落ちると、光秀はこの城に治右衛門を駐屯させた。天正10年(1582)6月2日、光秀は左馬助(明智秀満)・治右衛門・藤田伝五・斎藤内蔵助(利三)と謀って本能寺の変を起こした。同年6月2日、治右衛門は、信長の子の織田信忠らが籠る二条御新造を攻撃したが、その際に鉄砲で撃たれ重傷を負うとされる。知恩院で療養していたが、13日の山崎の戦いで光秀が羽柴秀吉に敗れ討ち死にしたと聞いて、近江坂本城に向かい、15日、明智秀満および明智一族と共に自害して果てたという。享年43。	0101

西暦1541

天文10	4月11日	細川晴元の臣茨木長隆(?~?)、京都北野経王堂大工職相論を停める。	0102
	6月20日	幕府、細川晴元に命じ石清水八幡宮造営料を山城国に課す。	0103
	6月29日	<b>三好利長(長慶)(1522~1564)、摂津国守護代となる</b> 。細川政権では、河内半国・山城半国守護代の木沢長政(1493?~1542)と同等。	0104
	9月-	この頃、三好利長(長慶)から「範長」と改名。	0105
	8月12日	三好範長(長慶)、細川晴元の命により波多野秀忠(?~1545?)・池田長正(?~1563)らと共同で、晴元に反旗の一庫城(兵庫県川西市山下)を包囲。	0106
	10月2日	河内半国・山城半国守護代の木沢長政(1493?~1542)、三万の兵で、摂津一庫城を救援。その前に三好範長(長慶)らは、一庫城包囲を解き越水城(兵庫県西宮市)へ撤退。	0107
	10月29日	<b>細川晴元(1514~1563)、木沢長政が上洛の兆しのため岩倉へ避難</b> 。	0108
	10月30日	將軍義晴(1511~1550)、木沢長政が京都に迫り、子(義輝)(1536~1565)らと慈照寺(銀閣寺)に避難。	0109
	11月1日	<b>將軍足利義晴、志賀越から近江坂本に退去する</b> 。	0110
	11月4日	木沢長政軍、三好範長(長慶)がいる越水城を攻囲する一方、原田城(大阪府豊中市曾根西町)を攻城。	0111

## 西暦1541

天文10	12月8日	「 <b>細川晴元、木沢長政討伐挙兵</b> 」。二万五千が、三好範長（長慶）(1522～1564) の撰津芥川城(大阪府高槻市殿町)入城。木沢軍と木津・淀川へだて対峙。伊賀・紀伊等近隣の守護に命じて包圍網を敷き、河内・大和・南山城に勢力をもつ木沢長政(1493?～1542)を牽制させる。	0112
	12月22日	將軍足利義晴が本願寺に対し、河内門徒が木沢長政に味方しないように命じ、本願寺証如(光教)がこれを受諾する。	0113

## 西暦1542

天文11	－	この年、吉法師(信長)(1534～1582)、那古野城(愛知県名古屋市中区)に移る。諸説あり。父信秀は、宿老として林新五郎秀貞(1513～1580)・平手中務丞政秀(1492～1553)・青山与三右衛門尉(?～1547?)・内藤勝介(?～?)の四人を付ける。しかし那古野では諸事不便があったので、翌年に信秀はここを吉法師に譲り、熱田近く(ふるなつりじょう)の古渡城(名古屋市中区)を築き居城としたという。	0114
	2月1日	六角氏の兵、細川晴元部将・高島長直(?～1549)と争闘し下京を焼く。(『言継卿記』)。	0115
	2月28日	<b>將軍義晴、近江坂本から帰京。</b>	0116
	3月17日	高屋城を見下ろすことのできる尼上山から北上しようとする木沢勢に、高屋城(大阪府羽曳野市古市)から出撃した幕府軍が襲いかかる。この「 <b>太平寺の合戦</b> 」で、 <b>三好範長(長慶)ら、木沢長政を打ち破る</b> 。木沢長政(1493?～1542)、討ち死。木沢長政が高屋城を攻撃し、三好長慶、遊佐長教が救援し、太平寺で木沢長政の軍勢と激突。畠山・三好・遊佐の連合軍が木沢の軍勢を撃破した。	0117
	3月26日	<b>細川晴元(1514～1563)、帰洛する</b> 。(『言継卿記』)。	0118
	4月8日	<b>室町第竣工し、足利義晴(1511～1550)、相国寺より移徙する。同日、幕府、撰銭を禁止する</b> 。 室町第(花の御所)が北小路室町の旧地に再建竣工。花の御所は、現在の京都市上京区の烏丸通・今出川通・上立売通・室町通に囲まれた東西一町南北二町の足利將軍家の邸宅の通称。かつては第三代將軍足利義満造営の「花の御所」、後に第六代將軍足利義教再築の「室町殿」があった所。これが室町第の最後の再建になる。名残としては、邸内に建てられた岡松殿にはじまる大聖寺が現存する。「撰銭」とは、良銭と悪銭とを選別する行為。	0119
	8月23日	<b>「大桑城の戦い</b> 」。斎藤利政(道三)(1494?～1556)、大桑城を攻め、美濃国守護・土岐頼芸(1502～1582)を子の頼次(1545～1614)ともども、尾張国へ追放し美濃を奪う。 <b>斎藤利政(道三)が土岐氏を下剋上で降し美濃国を掌握すると、明智氏は、いち早くその傘下に入り生き残りを図ることに成功する</b> 。 信長父・織田信秀(1511～1552)は土岐頼芸を保護し、斎藤道三と戦う。	0120
	9月26日	三好範長(長慶)、大和に入らんとし、松永久秀(1508?～1577)らをして山城に出兵。南山城に進駐。 松永久秀は、天文2年頃より三好元長(長慶の父)に仕え、元長の懇望で長慶の補佐役になるという。その後は天文10年(1541)頃より細川氏の被官・三好長慶の右筆(書記)として仕えたという。	0121
	11月14日	<b>後奈良天皇(1497～1557)、法華宗二十一ヶ寺の洛内還住を勅許</b> 。法華宗寺に洛中帰還の許しが出、市街地の復興が進んだ。	0122

## 西暦1542

天文11	11月20日	<b>千歳丸(足利義昭)6歳(1537～1597)(後の室町幕府第十五代將軍)、仏門(興福寺の一乗院門跡)に入り、「寛慶」と名乗った</b> 。	0123
	11月26日	三好範長(長慶)の部将松永弾正(久秀)が山城に着陣、近日乱入するとの風聞が大和に流れる。(『多聞院日記』)。	0124
	12月26日	<b>竹千代(徳川家康)(1543～1616)、岡崎城主松平広忠(1526～1549)(17歳)と、正室於大(1528～1602)(後の伝通院)(15歳)の間に、嫡男として生まれる</b> 。	0125

## 西暦1543

天文12	1月6日	<b>本願寺顕如光佐(本願寺第十一世)(1543～1592)、摂津国に本願寺第十世証如光教(1516～1554)の長子として誕生</b> 。(異説1月7日)。	0126
	3月20日	細川晴元の代官・茨木長隆、今村政次に、京都東山汁谷口塩合物公事銭を安堵する。	0127
	6月5日	幕府、薄以緒知行青花商売役の違乱不法を停止する。	0128
	6月-	<b>氏王丸16歳(1528?～1582)、明智城(長山城)主の叔父・明智光安(1500?～1556?)を烏帽子親として元服、「明智十兵衛尉光秀」となるという</b> 。	0129
	7月21日	「 <b>細川氏綱が挙兵</b> 」。細川高国の養子・細川氏綱(ただがた)の(子)(1513～1564)、撰津槇尾城より管領職を望み、細川晴元打倒を掲げて和泉槇尾寺(施福寺)(大阪府和泉市槇尾山町)にて挙兵する。対抗する晴元は撰津芥川城(大阪府高槻市)に出陣。 25日、氏綱は堺を攻撃。細川晴元命で出陣した三好範長(長慶)に攻められ、細川氏綱は退却、河内国守護代遊佐長教(1491～1551)、河内・紀伊・越中守護畠山植長(1504～1545)・畠山政国(植長の弟)(?～?)らと連絡をとり、態勢を立て直して河内から大和に入る。	0130
	8月27日	種子島に「鉄砲伝来」。	0131
	10月16日	朝廷、足利義晴に賀茂川の水を禁苑に引かせる。(『御湯殿上日記』)。	0132
	－	<b>明智光秀15歳、斎藤利政(道三)(1494?～1556)に出仕して学ぶ</b> 。(『明智軍記』)明智家の後ろ盾なった小見の方が、甥・光秀を道三に仕えさせたという。	0133

## 西暦1544

天文13	7月30日	本願寺顕如光佐(1543～1592)、2歳にして、細川晴元の息女と婚約。	0134
	8月9日	細川晴元、幕領および奉公衆給地につき洛中巷所百姓に令する。	0135
	－	筒井順昭(1523～1550)、木沢長政から離反した柳生氏を降し、越智氏、十市氏、箸尾氏を従わせる。大和をほぼ平定する。	0136

## 西暦1545

天文14	5月6日	細川高国の遺臣(細川氏綱方の丹波豪族の一人・上野源五郎元全)が挙兵し、山城井手城(京都府綴喜郡井手町)を攻略する。丹波の内藤国貞(?～1553)も、これに呼応する。勢いに乗り上洛まで果たす。	0137
	5月15日	河内・紀伊・越中守護の畠山植長(1504～1545)、没。植長は細川氏綱に与力し、細川晴元と敵対するも、強大な軍勢力を有する三好範長(長慶)を配下に持つ晴元を下すことができないまま、病没する。	0138

## あとがき

本書(上巻)は、戦国期のうち、大永7年(1527)の細川高国政権崩壊からはじめ、細川晴元・堺公方政権、三好長慶政権、三好三人衆政権など、永禄11年(1568)9月、織田信長が足利義昭を擁立して上洛するまでの京都の覇権争いの顛末の時代を切り取り、その軌跡を追ってみました。信長上洛前後は、明智光秀も登場し天正元年(1573)までのその詳細な年表を通して、信長らの戦い、休戦、和睦と激動、波乱の戦国時代を垣間見て頂けたら幸いです。

編集にあたり、別記参考図書・関連図書や国立国会図書館デジタルコレクション、東京大学デジタルコレクション、国の公式WEB、各自治体・各大学・各団体WEB等、大いに活用させていただきました。しかし、資料による違い、異説、物語などあらゆる事項があり、すべては、弊社の編集責で掲載しております。

「下巻」は天正2年(1574)からはじめ、天正10年(1582)6月の本能寺の変、その後秀吉が織田家中第一人者となるまでの軌跡を記載しました。

最後になりましたが、写真提供などしていただいた鳥越一朗氏、また、ご協力いただきました取材先様、スタッフの皆さまに、厚く御礼申し上げます。

## 惟任日向守、第六天魔王を討つ！ 年表帖 明智光秀・織田信長一代記(上巻)

第1版第1刷

発行日 2020年3月20日

年表 ユニプラン編集部

編集 ユニプラン編集部(鈴木正貴 橋本豪)

写真 鳥越一朗 他

イラスト 萩原タケオ

デザイン 岩崎宏

発行人 橋本良郎

発行所 株式会社ユニプラン <http://www.uni-plan.co.jp>  
(E-mail) [info@uni-plan.co.jp](mailto:info@uni-plan.co.jp)

〒601-8213 京都市南区久世中久世町1丁目76

TEL(075)934-0003 FAX(075)934-9990

振替口座/01030-3-23387

印刷所 株式会社 谷印刷所

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-89704-495-8 C0021